

資料数は増加し、より利用しやすくなることは間違いありません。附属図書館商議会としては、新たに電子図書館専門委員会を設け、電子図書館からの情報発信、学内向け情報配信の内容を検討しています。京都大学として外部に情報を発信するとともに、学内で行われる教育・研究活動に役立つ電

子図書館を構築したいと考えています。書物中心の従来型図書館と同様に、新たに生まれた電子図書館をご利用いただき、改善に向けてご助言下さるようお願いいたします。

(まんなみ みちひこ)

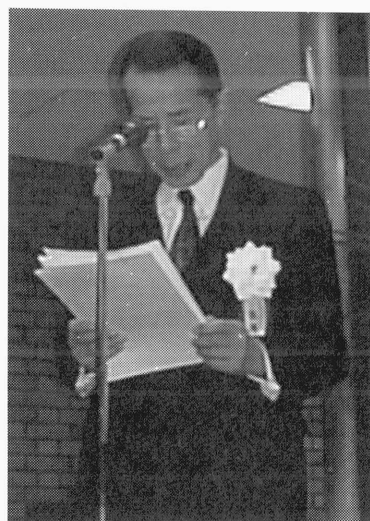
京都大学電子図書館のスタートにあたって

京都大学総長
長 尾 真

この度、京都大学附属図書館電子図書館システムが学内外の方々の利用に供されることになりましたことは大変意義のあることで、心よりお喜び申し上げます。

京都大学附属図書館の情報化の努力は1985年頃から始まり、目録・貸出し業務、さらに国立大学としては最初の学内学術情報システム網の整備が1990年1月に完成しKUINSと称して運用されるにしたがい、OPAC(On-line Public Access Catalogue)が開始されております。そして、1991年には宇治キャンパスとの間での電子ファイリングシステムによる新着雑誌目次提供サービスの実験が行われました。1994年には今回の電子図書館システムの原形である研究開発レベルでの電子図書館システム：アリアドネ(Ariadne)が附属図書館で試用されるようになり、附属図書館の「吉田松蔭とその同志」展の内容がアリアドネの上でも電子展示として公開されました。その後商用文献データベースの学内オンラインサービスはもちろんのこと、附属図書館の持つ種々の貴重書の電子化とアリアドネ上での公開が次々に行われるとともに、インターネットに附属図書館のホームページを設定

し、このホームページからこれらの多くの電子情報を見ることができるようにされました。このような着実な



努力は一つには文部省の「国立大学等優秀広報誌等表彰・奨励賞」を附属図書館のホームページが受賞するという荣誉につながりましたし、今回の電子図書館システムの予算化にもつながったわけであります。京都大学附属図書館のこの着実な努力に高い評価を与え、先進的な将来へ向けての京都大学附属図書館の努力に応え、しっかりした予算を付けて下さった文部省に対して心よりお礼を申し上げます。

京都大学附属図書館のシステムはいくつの特徴をもっております。その第一は図書館が従来行って来た業務部分の情報シス

テム化、これを業務システムといっておりますが、これと今回披露されました電子図書館システムとがうまく融合した統一的システムとして作られたということでもあります。業務システムは既に1月6日から旧システムと入れ替わって順調に運用されて来ておりますが、このシステムにおいても京都大学の各部局にある図書館・図書室、総計60余りに320台の図書館端末を分散設置するとともに、KUINS ネットワークを経て学内約8,000台の情報端末からのアクセスも可能であるという巨大で複雑なシステムであるというところに、他の単一の図書館の電子化とは本質的に異なった特徴があるわけであります。OPAC につきましては、現在遡及的に80万件の図書館資料についての検索がこれらの端末はもとより、インターネット経由で全国どこからでも可能となっており、学内外の非常に多くの人々から喜ばれております。

今回披露されました電子図書館システムは世界的にみても種々の独創的な新しい概念を導入した非常に興味のあるシステムであると言えるでしょう。知的所有権という問題があって電子図書館がうまくつくってゆけるかどうかという疑問がある中で、「京都大学エンサイクロペディア」という名称のもとに京都大学が持っている貴重資料のデータベース化、京都大学博士論文要旨集・各種紀要・百年史・京都大学案内、さらには大学院工学研究科の全教官の発表論文アブストラクトへのリンクなど各部局ホームページとのリンクを行い、京都大学が所有し、また創造している情報をどんどんと外部に対して発信してゆく拠点としての機能を果たそうとしております。そして各種の商用文献情報データベース、新着雑誌目次、電子ジャーナルなどのネットワークを介した提供など、学内の研究者・学生に向けての情報サービスをきめ細かく行っ

てゆくことや、本学の電子図書館固有のものとして書誌データ・目次データ・全文データなどのデータベースを整備しながら種々の高機能な検索や豊富な電子読書機能、また参考業務・利用ガイドなどの各種の図書館サービスをネットワークを介してスムーズに行うといった多くの特徴を持っております。さらには京都大学の各部局が創造する学術情報の電子化について強力な支援をするシステムをも付加し、紀要や博士論文要旨集、その他の各部局の情報の電子化とネットワークによる相互利用が円滑に行われるようにする機能もあわせ持っているのです。

そして、「机の上に京都大学」という素晴らしいキャッチフレーズのもとにこれら全体が広く京都大学の構成員に利用されるよう呼びかけてゆこうとしております。さらに大学における勉学の中での図書館の活用がいかに大切であるかということを認識してもらい、図書館を十分に活用する手法を教えるために学部学生を対象として「情報探索入門」という科目を全学共通科目の中に開設することになりました。これは教官による講義とコンピュータ端末を利用した演習を1対1に対応させて、部局図書館の人達をも含んだ図書館司書が演習を全部担当するという、これまでの一般の国立大学にはほとんどなかった形の図書館司書の積極的に参加した科目であります。そして、これに今回の図書館の業務システム・電子図書館システムが大きな役目を果たすわけです。

どこからでも誰でもが使える電子図書館はこれからの大学における研究教育活動の中でますます重要性が高まってゆくことは間違いないことであります。京都大学図書館の職員は、あらゆる部局図書館の方々までを含んで、今回の新しいシステムの設計に参加し、またシステム入れ替えに伴う

種々のめんどろな作業に対し、非常に積極的にかかわってこられました結果、非常にスムーズに新しいシステムに移ることができましたし、また今回世界的にも最も進んだ電子図書館機能を実現して下さいました図書館職員の皆様に心からお礼を申し上げます。これからは電子図書館の内容を充実させることが最も大切で、長年の忍耐強い努力が必要となりますが、1年1年着実に積み上げていっていただきたいとお

ります。

最後に、このような素晴らしいシステムができ上がった裏には、このシステムの具体的な設計・製作・納入・調整に何ヵ月も夜を徹して作業していただいた富士通株式会社の努力があります。その努力に対して深く感謝いたします。

電子図書館システムのスタートをお祝いして私のご挨拶といたします。

(ながお まこと)

祝 辞

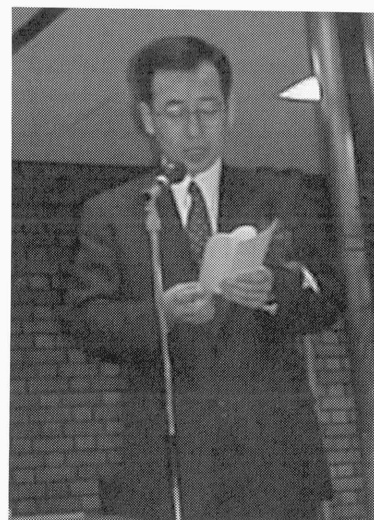
文部省学術国際局
林 一夫 学術情報課長

京都大学附属図書館電子図書館システム披露式が挙行されるに当たりまして、ひとことお祝いのことばを申し上げます。

大学図書館は大学におきまして研究・教育を支援する重要な施設でございます。大学改革や行財政改革という大きな変化の中で大学の内容の充実が一層求められておりますけれども、その中心として改めて重要な役割が強く求められてきていると思っております。

特にマルチメディア技術の進展とかインターネットの普及という電子化の流れを背景といたしまして大学図書館の機能とか役割が新しい側面をもってきているということとはご案内のとおりでございます。文部省といたしましても学術審議会の審議を経まして平成8年7月に「大学図書館における電子図書館的機能の充実強化について」という建議をいただきました。この建議をうけまして特色ある図書館電子化への取り組みをいただける大学に予算措置をさせていただきまして、全国の模範となるような取

り組みをお願いしたいということで、まず今年度京都大学と筑波大学の2大学に取り組んでいただいているわけでございます。



幸い京都大学では長尾学長が電子図書館実験システム「アリアドネ」をつくられ、京都大学図書館が貴重図書の画像情報やテキストデータを提供し実験に協力するとともに、電子図書館に関するノウハウをいち早く習得することができたと伺っております。更に私どもの科学研究費補助金によりまして貴重書の画像データベースを着々つくりあげて来られたことなど並々ならぬ努